

調査・研究活動——二〇〇一年度

祭祀公業の解体に関する現地調査

研究員 後 藤 武 秀

期 間 二〇〇一年二月二日～三月二日

調査地 臺灣臺北市

祖先祭祀を主な目的として設定された祭祀公業は、台湾に伝統的に多数存在してきたが、近年盛んに進められている土地整理事業の進展に伴い徐々に解体しつつある。しかし、元来が祖先祭祀の永続性の担保として設定され、永久に処分を禁じることが原則とされている土地であり、また幾世代も経るうちに子孫である派下が膨大な人数に上ることから処分に関する合意の形成が困難であることなど、多くの問題を露呈してきているのも事実である。

今回の訪問調査では、祭祀公業地が台北市の公園造成計画の対象となり、強制収用が行われた祭祀公業陳悦記を訪れ、管理人に解体の過程、解体に伴う問題点、解体後の一族共同体の維持方法等について説明を受けた。

祭祀公業陳悦記は、一八〇七年にその祖文瀾が渡台、現在の台北市北郊にあたる淡水梹壺濟世に居宅を構えたのに始まる。一八五三年に起こった

分類械闘の影響を受け焼失後、一八七九年に増築されて今日に至っている。この居宅は老師府とも呼ばれるが、それは三世の維英が自ら拳人となる一方、私塾を開いて多数の科挙合格者を輩出したことによる。

本祭祀公業は、台北市近郊の新興住宅地に林地を有しており、これが台北市の公園用地として強制収用されることになった。対象面積は一三、八四六平方メートルと広大であることから、収用は二回に分けて行われ、合計七億六千万余りの金銭が補償金として同公業に交付された。民国九〇年六月、臨時派下総会を行い、補償金の使途について議決を得、二五パーセントで老師府の修繕を行い、一五パーセントで財団法人を設立し、五〇パーセントを派下に分配することとした。財団法人は祖先祭祀を目的の一つに掲げており、従来の土地を中心とする財産によって維持されてきた祭祀公業が、金銭を中心とする財産によって維持されようとする点で、この台湾独特の一族共存の財産秩序が変質しつつあることを示している。他方、派下への補償金の分配については、全体の一六分の七を七つの大房に均分し、残りの一六分の九を派下の頭数で均分するという方式が採用された。本来、祭祀公業には房份という権利義務の割合が存在する。この割合によって分配するならば、派下に帰属する補償金はすべて房份に応じて分配されることになり、七つの大房にすべて分配されなければならないはずである。しかし、房には帰属人数の大小があり、この分配方式を採用したならば結果的に派下間の不公平を生じる。かといって、すべてを派下に均等に分配したのでは、本来の房份に反することになる。そこで、いわば現実的選択として、このような二つの方式を兼ね行うこととなったのである。ここにおいて、祭祀公業の伝統的な所有関係は崩壊していると見てよいであろう。

祭祀公業は、その所有関係の複雑性のゆえに土地整理がなかなか進まず、台北市の都市化を阻害する要因の一つとされ、強制収用という方法によってようやく解体されつつある。しかし、祖先祭祀を主目的として一族の共存を図るという祭祀公業の趣旨は財団法人としてその姿を変えることによって維持されようとしているのである。

社会変動と伝統文化の社会人類学的研究

研究員 宇佐美 隆 憲

期 間 二〇〇一年二月二七日～三月一〇日

調査地 ミャンマー・ヤンゴン

平成一三年二月二七日より三月一〇日まで、ミャンマー（ビルマ）の首都ヤンゴンにおいて、資料の収集並びに、今後の調査のための打ち合わせ等を行ってきた。

周知のように、昨年から今年にかけて（平成一三年から一四年）、ミャンマーは大きな転換期を迎えようとしている。このような変化の一つの大きな引き金となった出来事が、現政権の執行部のタカ派と目されている第二書記であったテイン・ウが死亡したという事件である。巷では、このことによって今後の政治情勢が大きく変化する可能性があると言われている。さて、このような状況の中でビルマ入りしたわけだが、スポーツ関連の活動においても、今までになかったような動きがみられた。それは、伝統

スポーツの一つであるミャンマーボクシング（レッウエ）が、五月ないしは六月に外国人選手と交流試合を行うという予定が組まれようとしていたからである（この試合は二〇〇一年六月九日、一〇日に予定通り開催された）。これまで政府によって海外で行われたミャンマー・ボクシングの試合は一九六〇年に中国で開催されただけで、その後、一九九〇年中頃にレッウエの関係者と選手が個人的にドイツやオーストラリアに出向いて、現地のキックボクサーなどと試合をおこなった程度であった。

ところが、今回予定されている大会は、ビルマ国内に外国人選手を招待して、国内の有名選手たちと試合をさせようという、今まで考えることもできなかったような計画が持ち上がったのである。この計画の全容は、その後の調査で、さらに詳しく知ることができたが、今回の調査では、このような情報を入手できたとともに、ミャンマーのスポーツ関係の部署が、このイベントを開催するために、どのような動きをしようとしているのか、といった活動内容を目の当たりにすることができたことは、大きな収穫の一つでもあった。

また、このような動きと関連して、レッウエの指導者の間にも変化がおこっていた。それは、今までレッウエの活動を指導現場のサイドから引張ってきたKLNというグループの指導者が、ここから離れて、独自に新しい弟子を抱えて指導を始めていたからである。この指導者は、ミャンマーの伝統スポーツ連盟においても、参与的な役割に就いており、技術指導や外国との交渉などの窓口となっていた。そのようなこともあってKLNは、ミャンマー・ボクシングにおける一つのモデル・ジムともいえる存在であった。

しかし、このように独立して、新たにジムを立ち上げたということは、ミャンマーの伝統スポーツの一つとなっているレッウエのあり方が、大きく転換しようとする兆候とも見て取ることができ、また同時にレッウエの裾を広げていく活動とも捉えられる。このような動きは、徐々にレッウエがミャンマーの国民スポーツ文化として地位を獲得していくことにも繋がる活動と連動している一つの現れではないかと考えられる。

さて、これとは別にミャンマーのスポーツ省と今回の調査を実施するための打ち合わせをおこなった。今回の調査は、八月に予定されているが、ここでスポーツ省の傘下にある「体育・スポーツ専門学校」を訪問することが一つの目的であるので、そのための手続きを事前に完了させておく必要があった。打ち合わせは思いの外順調で、次回、現地入りした時に、スポーツ大臣と面会し、そこで最終的な了承を得て専門学校を見学させてもらえることになった。体育・スポーツ専門学校は、いわゆるミャンマーのトップアスリートを養成する学校の一つであり、現在ミャンマーが、どのようなスポーツに力を入れようとしているのかを知ることができる。ここでの調査結果については、別稿で報告する予定である。

なお、専門学校以外で現在スポーツの指導をしている各フェデレーションの状況もあわせて調査をおこない、ここに指導に来ている外国人コーチたちについての情報も入手した。ミャンマーにおけるトップアスリートの養成機関は、一部、このようなフェデレーションによって担われており、ミャンマーのナショナルチームの予備軍が、ここでも指導を受けている。その中でも特に外国人コーチの役割は大きく、最新のスポーツ技術の導入はこうした外国人コーチたちを経て、ミャンマー国内にいる選手たちに伝

達されることが多いことから、外国人コーチがどのようなスポーツを指導しているのか、といった状況を知ることが、今後のミャンマーのスポーツ活動の方向性を知るためにも必要なことであると感じていたからである。ミャンマーで指導に当たっている外国人コーチたちの活動については、今後、少しずつではあるが調査を進めていく予定である。

以上、短い調査期間ではあったが、それなりに大きな収穫があり、また、今後の調査の準備もスムーズに進められたことは大変有意義であった。

中国古代民族官印調査

研究員 谷 口 房 男

期 間 二〇〇一年三月一日～一日

調査地 関西（大阪・奈良・京都）

概要

三月一日より一日までの三日間、関西に出かけ、とくに大阪では久保惣記念美術館を、奈良では寧楽美術館を、京都では大谷大学図書館を訪ね、中国古代民族官印調査を行った。

まず久保惣記念美術館を訪れたが、ここには園田湖城氏が収集した中国古印が多く収められており、その中から漢代の民族官印である「漢夷長」・「漢叟長」・「漢婦義夷長」の三顆を見学した。これらの官印は、ともに銅印であるが、鈕がそれぞれ異なっていた。

次いで寧楽美術館を訪問し、かつて中村準一氏が収集した中国古印の中から、とくに「漢夷邑長」・「漢叟邑長」・「漢青羌邑長」の三顆を見学した。なおここにはこれらの他に、三〇数点もの多くの民族官印が所蔵されており、その中から駝鈕印と蛇鈕印を中心として、さらに数点を見学することが出来た。

最後に大谷大学図書館を訪れ、大谷禿庵氏が清朝の考証学者羅振玉氏から譲り受けた中国の古代官印の中から、「漢匈奴惡適戸逐王」・「帰義長印」・「漢帰義胡長」の三顆を見学した。

今回は関西で中国古印を所蔵する代表的な機関を訪問し、とくに漢代の民族官印を見学したが、かねがねいっていた疑問が実物を見ることによって氷解するとともに、新たな疑問もわいてきた。あらかじめいっていた疑問とは、中国南方の民族にしか与えられないと言われてきた蛇鈕の印が必ずしもそうではなく、漢代のはじめには中国のあらゆる地域の官吏に与えられていたことが、漢代の半ば以降は民族官印の鈕として用いられるようになったことがわかる。一方、一つの民族には一つの動物の型をした鈕の印章が与えられるといわれていたが、今回いくつかの民族官印を見学してみると、必ずしもそうではなくて、蛮夷の官印には蛇鈕印と駝鈕印とが確認された。また叟民族の官印には駝鈕印と羊鈕印とがあり、さらに匈奴の官印には馬鈕印と駝鈕印とがあるなど、従来の見解と異なることがわかった。このことは鈕の形がどのような基準で決められているかということに對する、新たな疑問を提出することとなった。更に民族官印に多くつけられている「漢」という王朝名が果たしてどの王朝に相当するかという疑問である。従来は漢代あるいは前漢または後漢というようにいわれていたが、

果たしてそうであろうか。少なくとも理念的には蜀（蜀漢）や成漢の民族官印であることも想定されるのである。とりわけ現存する三国時代の民族官印が、すべて魏のものであるといわれているが、『三国志』などの文献には、呉や蜀の皇帝が周辺の民族に官印を与えたという記事が散見しており、何故に呉や蜀の民族官印が存しないであろうか。このことから、「漢」を冠している民族官印のなかには、蜀のものがあるのではなからうかと思われるのである。また王朝名のない民族官印が、わずかではあるが現存しており、この中には呉や蜀のものがあるのではなからうか、という疑問がわいてくるのである。ともあれ今回関西の諸機関を訪れ、数個の民族官印を見学してきたが、新たに多くの疑問が生じたのであり、今後更に国内外の民族官印を所蔵する機関を訪ね、検討を続けていきたいと願っている。

四川の歴史と民族を訪ねて

研究員 谷 口 房 男
研究員 飯 塚 勝 重
研究員 菊 池 良 輝
研究員 北 條 祐 勝
研究員 佐 藤 三千夫

期 間 二〇〇一年八月一七日～三〇日（一三日間）

調査地 中華人民共和国（西安・成都・漢中）

目 的 ①『華陽国志』現代語訳注作業を進めていく上での地理的景観と歴史理解のため。

②四川大学古籍整理研究所教授劉琳先生との面会および現地の人々との意見交換のため。

③関連資料の収集のためなど。

なお今回の調査旅行に参加した各人は、それぞれ個別のテーマをもって臨んだが、主として次のようであった。

谷 口 四川の少数民族とくに蔵（チベット）族と羌族

飯 塚 陝西・四川の地理的景観、西部大開発

菊 池 陝西・四川の歴史地理

北 條 陝西・四川の歴史人物

佐 藤 陝西・四川の考古発掘

概 要 八月一七日朝十時に成田を発ち、午後一時半ごろ西安空港に到

調査・研究活動

り、早速陝西省博物館を見学し、今回の調査旅行が始まった。その後一三日間にわたり、陝西・四川両省各地の名所古蹟や少数民族の居住する村および観光地などを見学し、八月三〇日夜遅く成田空港に到着し、今回の旅を終えた。この間に見学した主なところを挙げれば、まず陝西・四川の考古発掘現場あるいは博物館を訪ねたのは、先の陝西省博物館をはじめ宝鶏青銅器博物館など、および秦兵馬俑坑・三星堆遺跡・金沙遺跡・秦公大墓・半坡遺跡などである。また歴代の皇帝陵としては、秦始皇帝陵・乾陵（唐高宗）・茂陵（前漢武帝）・陽陵（前漢惠帝）・昭烈帝廟（蜀劉備）などである。さらに歴代の著名人の墓としては、前漢の衛青墓・霍去病墓・張騫墓、後漢の蔡倫墓、三国蜀の諸葛亮墓と武侯祠（成都と漢中）・马超墓などを見学した。一方、四川省内の民族として蔵（チベット）族の村や彼らの信仰するラマ教の米寺（黄帽派）などを訪ねた。さらに陝西・四川の景勝地として、黄竜・九寨溝などを観光した。その詳細については、以下に示した通りである。

成 果 陝西・四川の両省をバスと列車で一三日間に、なんとおよそ三千キロを超える長旅を続けたのである。この間、歴史的な名所古蹟をはじめ、蔵（チベット）族や羌（キョウ）族の村を見学したり、また四川大学古籍整理研究所教授劉琳先生にお会いして意見を交換するなど、大きな成果をあげることができた。こうした成果を今後の研究にかすとともに、『華陽国志』現代語訳注作業を進めていく上に役立てていきたい。とりわけ黄竜や九寨溝など

中国第一級の景勝地を見学することができたことは、きわめて感銘深い旅でもあった。

旅程 今回の調査旅行の日程は、以下の通りであった。

一七日(金) 一〇・〇〇 成田発

一三・一五 西安着

◎陕西省西安市 書店、陕西省博物館、仿唐樂舞

一八日(土) 八・〇〇 賓館出発

清竜寺、兵馬俑坑博物館、始皇帝陵

一五・〇五 西安発 SZ四六一〇便

一六・三〇 成都着

◎四川省成都市

一九日(日) 八・三〇 酒店出発

三星堆遺跡、武侯祠・昭烈帝廟、四川省博物館「巴蜀尋根」、書店

劉琳教授面会

四川雜劇

二〇日(月) 七・三〇 酒店出発

金沙遺跡、都江堰、汶川県昼食、茂県經由

◎四川省阿坝藏族羌族自治州

二二日(火) 八・三〇 賓館出発

松藩古城(松州)、雪峰頂(五八〇〇メートル)眺望、黄竜

二二日(水) 八・三〇 山莊出発

雪宝頂眺望、藏族民家、牦牛肉加工場、孕米寺(ラマ教黄

帽派)、藏族舞樂

二三日(木) 七・〇〇 大酒店出発

終日九寨溝見学

二四日(金) 七・三〇 大酒店出発

江油市・綿陽市・劍閣県經由、劍門関

二五日(日) 八・〇〇 賓館出発

皇澤寺(武則天)、千仏崖、明月峽

◎陕西省漢中市

武侯祠、馬超墓、武侯墓(定軍山)

二六日(月) 八・三〇 賓館出発

石門棧道、古漢台(劉邦)、南鄭県、蔡倫墓、張騫墓

二一・二一 漢中駅から列車

二七日(火) 六・〇〇 宝鶏駅着

◎陕西省宝鶏県

古大散関、嘉陵江源頭、宝鶏青銅器博物館、秦公一号大墓、法門寺

◎陕西省西安市

二八日(水) 九・〇〇 賓館出発

天下大一餃子宴

二九日(木) 八・〇〇 賓館出発

乾陵(則天武后・高宗)、永泰公主墓、衛青・霍去病墓、茂陵(前漢武帝)

半坡遺跡、華山

二〇〇

三〇日(金) 八・三〇 賓館出発

大雁塔、西安碑林、陽陵(前漢惠帝)

一五・三五 西安発 JD二五六便

二〇・一〇 成田着

なお、西部大開発関連については、別掲飯塚勝重「中国西部大開発―垣間見た西部開発の一側面―」(二七(二五八)頁―三六(一三九)頁) 参照。

長江流域都市の諸相

研究員 野間 信幸

期 間 二〇〇一年八月一九日―八月二六日

調査地 中華人民共和国 重慶・三峡、宜昌、武漢

一、歴史の重層より

湖北省博物館には、曾侯乙の墓より出土した編鐘という釣鐘楽器が展示されている。この巨大な古代楽器は、己の威容を誇るかのごとく鎮座して、見学者を圧倒する。大小六十五個からなる編鐘のなかで、下層中央に吊るされた大鐘がひととき目立っている。これを鐃鐘といい、曾侯乙の逝去に際し楚の恵王が贈ったものであるところから「楚王鐃鐘」と呼ばれている。「楚王鐃鐘」に象徴される楚と曾の友好関係は、楚呉戦争の産物であり、呉に攻め込まれた恵王の父昭王が曾国の乙にかくまってもらった経緯があったことである。

この危機を乗り越えた楚は、春秋期から引き続き戦国期にかけても長江中流域の強国として栄えることになる。後に統一帝国を樹立する秦にとつて、もつとも脅威と感じられるほどの国力を持つまでに至るのである。

楚の国力を支えた基盤は、現在の湖北省を中心とした広大な支配面積だけにあったのではない。文化面でも、当時文化の中心地とされてきた中原諸国から蔑まれることはあったが、この地にも長江文明以来、上記博物館の展示品から屈原・『楚辞』に至るまでの豊富な文化が蓄積されていたことを忘れてはならないだろう。

問題は、楚の国力や文化を支えたものは何であったのかということである。それは宜昌から武漢まで、四百キロを超える道のりのなか江漢平野を横断したときに、車窓に広がる風景を見ているうちに把握することができた。

八月の江漢平野は、一面緑の絨毯であった。稲穂を垂らした米が、収穫を待つ状態であったし、トウモロコシ畑も広がっていた。また水の豊かさも見取れた。湖や河川など自然のものばかりでなく、まっすぐに延びる運河もよく目にした。池ではウナギの養殖も盛んであるという。

こうした豊かさが、楚を支えたということであろう。

自ずと三年前に訪れた西安郊外の風景を、思い起こさざるをえない。秦の国を支えた関中平野は、黄土高原のもたらす恵みによって麦・粟・蕎麦などが収穫される。しかし黄河のもたらす恵みは、長江のもたらす豊かさには及ばないようだ。西安の背後にある陝北の中心地延安の貧しさを知ると、関中の豊かさも奥行きが限られていると思えてしまう。

秦が法家の思想を導入し、構造改革によってはじめて強国になりえたの

も、こうした立地条件から受ける制約と無関係ではない。江漢平野を持つ楚は、改革の努力なくしても豊かであったし、そのために秦にすれば最大の脅威となったのであろう。

長江流域と黄河流域の差を意識したことより想像されるのは、南北間でこれほど生活様式や食べ物に著しいちがいがあるかぎり、他地域に侵攻した兵はまず食事に苦しみ、やがて体調を壊してしまつたにちがいないということである。兵隊が戦闘力を失うと、軍隊としては無力となる。南北間に秦嶺山脈が自然の障害として横たわることだけが、両域を隔てていたのではないだろう。

二、お国自慢と地域感情

上海から重慶に飛ぶとき、上海人から彼の地は田舎だから不便だよと「忠告」された。昔日の不夜城の観を取り戻しつつある上海からすれば、どの都市も田舎に見えるのは当然かもしれない。ただ唯一田舎扱いのできない北京に対して、上海っ子は昔から猛烈に対抗心を燃やす。文芸界においても、作風を異にする海派（上海）と京派（北京）は、一九二〇年代以降折り合いがよろしくない。

さて重慶に入ると、当地の人はここが政令直轄地であることを自慢する。政令直轄地は全国で四つしかなく、北京・上海・天津とここ重慶だと、繰り返し同じことを聞かされる。こういう物言いは、他の三都市と肩を並べているという誇りの表れと思える。さらに駄目押しのことも用意されていて、重慶は四川省ではない。なぜなら政令直轄地だからだ、という次第である。「都時代」という表現も何度か耳にし、興味をおぼえた。これは

日中戦争期、蒋介石の南京政府が武漢を経て、大後方であった彼の地に遷都した時期のことをいったものだ。蒋介石の名が頻出することに軽い驚きを覚えながら、そういえば台湾でも最近ほとんどその名を聞かなくなつてしまったことに（大陸の奥地、大後方で）思い至るのであった。

重慶人の示すこうしたプライドは、三峡のダム工事で立ち退きを迫られた千二百万人のうち、八百万人を受け入れる痛みを、精神面で和らげる緩和剤の役目を果たしているようにも思えるのである。

ところで、四川省はかつての巴と蜀を含んで成る。巴は現在の重慶を、蜀は成都を中心とした地域である。重慶に来てはじめて知ったことであるが、重慶の人は成都を認めない、というより嫌っているのである。その地域感情を、露骨に表して憚らない。それは北京・上海間のそれに勝るとも劣らないものであった。ここに重慶人の主張を記録しておこう。

製造業の盛んな重慶の人は、正直であり、まっすぐはつきりと物を言う。ところが商業の盛んな成都の人は、曖昧な物言いをし、狡猾である。物造りの有無はいかにもよくできた説明であるが、それならば三鎮が合併して成った武漢ではどうなっているのだろうか。工業の漢陽、商業の漢口、政治と文化の武昌はいがみ合っているのだろうか。租界のあった漢口や大学の集まる武昌よりも、物造りの漢陽で尋ねてみるとおもしろいであろう。

三、近代化の諸相

近代化とは、都市の景観から個性を取り除き、画一化の現象をもたらしものでもある。この観察は、かつてミャンマーを訪れたときの報告で記し

たことがある。

中国の改革・開放路線に基づく開発プログラムの重点は、近年来沿岸部より内陸部に移された。西安地区を核とする西部大開発を、その代表例とすることができる。

重慶でも都市開発は進行しており、昔日の馬路（大通り）の景観はほぼ消滅しつつある。しかし近代化の波及はまだ表通りで止まっているといってもよく、一步路地に入ると、重慶独特の急斜面にへばりつくように民家が肩を寄せあっており、スラム的な雰囲気や漂わせながら共同体が機能している様子がよくわかる。夕刻、裸電球の乏しい灯の下で営業される不衛生な食堂が繁盛していたり、家族一同お椀ひとつを持って室外で立つて食事している家庭もある。身寄りのなさそうな二人の老人が屋外の床机に腰掛け、お椀を傾けているところとも出くわした。彼らは路地に迷い込んできた旅行者を不審な目で眺めながらも、道を尋ねるとにつこりとして教えてくれるのであった。

自転車走っていないのはこの町の特徴であるが、繁華街に棒と縄を持った荷物運びの男たちがたむろする姿も、昔日のままであろう。ついでながら街角に年代物の足こぎミシンを出して、縫物屋を営む人たちが何人かいたことも記しておく。

三峡ダムの建設による長江沿岸住民の移転先マンションも、江岸高いところに建築されつつあり、近代的建造物の表情を川面に映していた。その豪華な外観は、歴史的遺跡を求めて長江に遊ぶ旅人には興ざめな代物ではないが、巫山のような小鎮でも五万人の移住を図らねばならないというのであれば、マンション群の林立も避けられないことであろう。瞿塘峡の

あたりで水没水位が已に百mに達したと見えた（最高表示一七五mと次に一三五m表示があったところから目測）ので、マンション建設はいよいよ大詰めにかかっていると思える。そのため小鎮では新建築物と旧住居が混在しており、船から眺める町全体が、実勢より大きく見えてしまうことになる。

三峡ダム建造で大きく膨らんだ町が、三峡下りの終着点宜昌である。三八万人の人口が五十万になったという。三割の人口増である。今や住民のほとんどが、ダムに関係する仕事に従事しているらしい。このように短期間で膨らんだ町の建築物は、外観よりうかがえる造りも色もバブルの持つ浮つきを隠せない。歴史を刻んだ町は、町の中に重層構造を抱えていて落ち着きをもつものであるが、ここにはそれが感じられなかった。

近代化による都市の画一化現象のひとつに、交通渋滞がある。中国ではまだモータリゼーションが訪れていないが、タクシーやバス、トラック、そして私用でも使われていそうな公用車が、交通渋滞を引き起こしている。重慶や武漢も例外ではない。

このような都市景観の均一化のなかで、そこに暮らしている人々の意識が、徐々に変化を見せていることも、興味深いところである。上海と武漢での見聞から、二件報告しておく。

上海では、二〇〇八年オリンピックの開催が中国に決定したことに祝辞を述べると、皆が喜んでいるわけではない、と言われてしまった。この人は元々単純思考の人ではないが、国家的行事についても多様な意見の存在することが、発言の背景にうかがえた。

武漢では、旧租界について、隠すことなく語られるようになったという

印象を得た。一年半前に訪れたときは、案内者に日本租界の探索希望を伝えたものの、古い建物に案内するだけで、租界を語りがらない雰囲気を感じたのであった。しかし今回は質問さえすれば、英租界や日本租界について屈託なく説明を受けることができた。もともと『老武漢』（江蘇美術出版社・二〇〇〇年一月）のような書物も出版されており、租界を隠す必要もなくなっているのであるが、この件をとおして包み隠さず話せる雰囲気が進んでいるような印象をもった。

ただしこうした意識の変化・多様化は、近代化がある一定レベルを超えたところで表面化するものであろう。中小の都市では、素性のわからぬ外国人に気軽に話せることにはなっていないと思われる。

英国議会資料の中央アジア・新疆関係記事の調査

研究員 真田 安

期 間 二〇〇一年八月七日～九日

調査地 国立民族学博物館

一九九八年国立民族学博物館地域研究センターに、一八〇一年から一九二二年までのほぼ完全な内容の原本である英国議会資料（旧英国商務省所蔵版）が京セラから寄贈された（京セラ文庫）。当英国議会資料は、この長い大英帝国の盛衰の期間に英国が関わった世界の各地域と民族に関しても、政治、経済、社会、文化について独自の記録・情報を残しているとい

われる。

調査者は新疆ムスリム・オアシス社会史を研究テーマにしている。一八六〇年代新疆のムスリム住民の反乱を機に、コーカンド・ハン国からやってきたヤークープ・ベクによるムスリム独立政権が樹立された。当時ロシアと「グレート・ゲーム」を展開していたイギリスはロシアにまけじこの政権と通商条約を締結し、カシユガルに領事館を設立させた。これ以降、カシユガル領事、ベンガル政庁を中心に、新疆の情報がイギリスにもたらされてくる。今回の調査は、この時期以降の新疆に関する記録・情報を英国議会資料より探索・収集することの可能性を探ることを目的とした。マイクロ・フィルムでの利用は行われているが、史料としての原本での確認の調査という意味もあった。

清朝よりはるかに広大な大英帝国の当資料から当該地域の記述を探索することは、清朝の実録から当該地域の記事の探索より手間と時間が必要であることが実感できた。調査の継続を確認した。

沖縄におけるマメ類の儀礼に関する比較研究

研究員 大越 公平

期 間 二〇〇一年八月一七日～二七日

調査地 沖縄（伊良部町、平良市、下地町、上野村、石垣市、那覇市）

ここ数年、健康食品ブームにあやかっであろうか、宮古空港の土産物

店でも「島あずき」（黒いササゲ）が特産品として販売されるようになった。サトウキビ栽培の緑肥として始められたと伝えられるマメが地域活性化に一役かっている。

今回の調査は、継続して研究しているテーマ、儀礼研究の一環として、こうしたマメに焦点を絞り儀礼やそれに関連する習俗の調査を行った。米に関する儀礼の研究が中心であり、ようやく麦・粟の儀礼にも関心が集まっているが、マメに関する儀礼や習俗となると民俗誌的な報告以外、研究の対象として注目されるまでにはいたっていない。しかし、筆者は沖縄文化の特徴を探るための新たなポイントであると考えている。伊良部島（一七日～二二日）、宮古島（二二日～二四日）、石垣島（二四日～二六日）、那覇（二六日～二七日）とまわり、開書きをした。なお、最終日には、食物史に関する文献研究をされている金城須美子琉球大学教育学部教授を訪ね、懇談し、多くの示唆を得た。本調査およびこれまでの準備調査の成果は『研究年報』での報告を予定している。

ベトナム村落の社会人類学的研究

研究員 末 成道 男

期 間 二〇〇一年八月六日～八月三十一日

調査地 ハノイ近郊、フエ近郊（ベトナム）

はじめに

調査・研究活動

本研究プロジェクト「社会変動と伝統文化の社会人類学的研究」のため、二〇〇二年八月六日から九月三日までベトナムの北部および中部を調査した時の日記資料をまとめたものである。その時、撮り貯めたビデオテープの解説資料としての意味も持っている。主なトピックは、北部では、この八年間つづけている定点観測の拠点の潮曲における、三聖デンの祭、出夏の礼、ゾンホ祠堂新築と始祖の忌祭、中部では阮朝の王都フエの女神信仰、道教的要素の残存、近郊村落の村祭りなどである。なお、登場人物の名は仮名を使用した。

八月 六日 香港ハノイ間の切符がオーバーブックイングとかで次便にまわされ、夜八時にハノイに到着、百科大学の外国人宿舎A^ア二に宿を取る。ここに泊まるのは初めてだが、中心に比較的近いのと、今回は、ここに長く滞在されている大西さんと中部に出かけるのに便利のためもある。二日ほどハノイで民間文化研究所を訪問し挨拶したり、特に最近増えた若手研究者と会ったりしてすこす。

八月 九日 潮曲へゆき、人民委員会に挨拶の後、大亭などを訪れる。前回とは、堂守が変わり、集まっている長老たちの顔ぶれもやや異なっているが、寺池は相変わらずどんよりと濁っている。社の幹部も公害問題の重大性は十分認識しており、汚水が流れ込まないよう手は打っているそうだが、最近の「経済発展」の勢いに追いつかないようだ。以前見かけた蓮が生え花開くのはいつだろうか。

八月一〇日 詩人N H Y Tさんに道で出会い家に誘われ、近作の詩をみ

せてもらう。もちろん、こちらのベトナム語で詩をろくに鑑賞出来るわけではなく、専ら従順な聴き手として徹するだけだが、少なくとも何にどのような関心が有るのかは判るし、聞きたいことに丁寧に答えたもらえるというおまけもつく。カイフォン（露天の祭壇）通りを歩くと、以前木立に囲まれてひっそりと、その原型を偲ばせ立っていた翁堆爺のカイフォンが、コンクリート製の壇に変わり、すっかり整理された明るい広場の中心に据えられている。しかも「翁堆爺」という漢字が消え何を祀っているか外見からはわからないごく普通のものに変わっている。夕食後、寺をのぞくと、出夏の行事も近づいているので、四〇名余りの老婆を中心とする信徒が熱心に読経をしている。

八月二日

家主の実家で、お爺さんのソン老が昨年亡くなったので、挿香（焼香）に行く。ソン老は、八十老の赤い服装が似合う、快活な笑いが印象的な小柄な長老で、祭壇に向かいちょこんと手を合わせ朗々と唱える祈詞は、普通のひとの祈りでは声を出さず録音できなかったもので有難かった。一九九四年以来の潮曲調査の劇から主役がまた一人去った想いを強める。

八月二日

三聖デンの祭の準備の一つとして中庭の天幕張りが行われる。これは雨だけでなく日射しをよけるため、人が集まる場合欠かせない作業である。帰りに、祭礼実行班主任のカ

イン老に誘われ自宅までついてゆく。庭にしつらえた個人的な拝所のテーブルでビスケットをつまみに手作りの梅酒をごちそうになる。午後、三時半ごろから四時まで三聖デンで長老たちの見守るなか、供仏の読経が行われる。この祭りは、むらの定期的儀礼としてはもともと動員力が小さいが、それでも十数人が供え物をもって参拝に来る。社の人民委員会からも、幹部五名が供え物を持ってきて、接待で挨拶し、拝み、お茶を飲んで、しばらく雑談して帰る。拝み方も、正式のきちんとしたもので、ドイモイ以前には考えられなかったことであろう。つづいて、お婆さんたちのグループがやってくる。一七：〇〇ごろ、座っていた長老たちも三々五々家に帰る。

夕食後、三聖デンに行く。堂守が供え物をならべ、線香、ロウソクに火をつけ、礼拝するほか、とくに大きな儀礼は無いが、本来はお籠もりの意味もあつて信徒たちが集まり、カードゲームやトランプに興じて夜を過ごす。最近珍しく停電になったので帰る。

八月二三日

四：三〇 起床、豪雨。六時過ぎに始まる予定の三聖デンの例祭が六時半頃になって雨が止みかけても揃わず、七時過ぎに開始する。潮曲特有のリズム感のあふれる太鼓の伴奏を聴きながら関羽の徳を頌誦する経儀を一時間足らず読み上げ、儀礼を終わり、参会者一同受禄、つまり供え物のお下がりをいただく。八時半ごろ本殿奥で食べ終えた長老

たちから引き揚げる。宿に帰り、さっそく、三聖デンの例祭のデジカメ写真を整理し、パソコンのファイルに写真を貼付ける。十枚で一メガバイトだが、持参したマックは十ギガバイトの容量があり全く気にしなくてすむ。写真がみな現地でパソコンに収まる魅力、これまで考えられなかったことである。

八月一四日

ホアさんが拙著『潮曲の祖先崇拜』のCDを試したが、見られないと言うのでびっくりして小学校の情報教育教室に行き、事情を話して試してみるが、ここでも出ない。Windows日本語版が国内でしか通用しないローカル版にすぎないことを思い知らされる。この分だと、アメリカ、台湾、韓国、中国に送った分はすべて見てもらっていないことになる。CDについての反応が全く無かったのもこのせいであろう。それにしても、あるベトナムの研究者が「このCDは面白いと人に貸したら紛くしてしまった」と言っていたのは何だったのか。

八月一五日

Ynさんの招待で、ハロン湾見物。松島よりスケール大きく、様々な船が浮かんでいて、水上の様々な生業と生活を想像させる。漁船が横付けにして生簀の魚を観光客に売っているのが面白かった。島が上がって、鍾乳洞見物。洞内の道路も整備され、赤、青、緑の照明で照らし出され、きれいなのだが人工的な平板さを感じさせる。日本で鍾乳洞を見物したことはないのだが、同様なのだろうか。船上の

八月一六日

昼食は、取れたての貝や魚料理で満腹。
七・三〇 イエンが市場に行くというので、ついて行く。結局、花を沢山買いイエンの実家のガー婆へのお見舞いに行くということだった。話している内に、CX氏族長の家から幹部は集まって下さいという呼び出しが来る。イエンの父と一緒にいて行く。ゾンホ（父系親族）の幹部会議は、定期的に開かれるものではないので、こうした偶然の機会でもないと思られない。話し合われたのは、こんどの土曜に開かれる始祖の忌祭の打ち合わせだった。ほぼ一段落したところで失礼し、新築のCX氏祠堂と墓を見て一〇時に宿に戻る。

八月一七日

八・〇〇 スワン婆さんの住まい（個人の簡単な殿ディエンと寝室よりなる簡素な平屋）を訪ねる。もともとむらのはずれの野原にあったのが、まわりが二階建て、三階建てに増築され、向かいの空き地に数基あった墓も一部は道路に取り込まれている。留守だったので、その実家のホンさんの家に行ってみる。

ここも既婚の息子達が敷地内に二階建ての家を建て増し、以前に比べると立て混んでいる。しかし、中庭が広く、屏風障壁の前に卓とチェアを並べあずまや風の空間とし、お茶を入れているのはのどかである。ここで話を聞いて、孫を抱いた写真を取り、家の中を見せてもらう。すでに、以前ビデオを撮ってあるが、デジカメに収める

のに都合が良いのでパチパチ撮っていると子供とその母親が寄ってくる。撮った画面を見せるとボラロイド効果で大喜び。ボラロイド写真のようにすぐ配らなくて済むので助かる。帰りに、ベトナムでのIT教育の様子をみたいので小学校のパソコン教室を覗く。アクション、カード、ランプ、積み木などのゲームを通して、MS-DOS Windowsの操作を教えている。

帰り道に、ファー翁に出会う。一通りの挨拶を交わすと、お茶を飲んで行けと誘われる。そこで、出されたのが、南薬（ベトナム漢方）のお茶だった。聞いてみると、南薬学をラン翁やトエン和尚の本を読んで、三十数年勉強したという。このお茶を買いいたいという、二種の薬草と一種の粉末を包んでくれる。気温が三十六度以上のとき、涼しく感じるほか、傷がとれて、発疹もひくという。お代をとというと、「あなたは^{30歳}（貴）だから」と受け取ろうとしない。門を出ると、スワン婆さんに出会い、そのまま手を引かれ、近くの家につれていかれる。孫の家族かと思っていると、近くの外大に通う地方出身の学生の下宿で、スワン婆さんとは仏教の信徒として祖母と孫のような擬制的関係らしい。仏教について、かなり知識あり、それほど教条的でなく話しやすい。初めは英語だったが、話しくいらいしくベトナム語になる。そうするとこちらが困るが、ヒヤリングの力をつけるのには有益で

八月一八日

長逗留できればと思う。スワン婆さんがさらに、「寺に行こう」と言って聞かず、寺の戸が閉まっているのを小僧に開けさせる。ちょうど良いチャンスと、大学生に第三者の立場から各仏像の名前を確かめる。

一五・三〇 ホアさんの家に、他で試すために借りた『潮曲の祖先崇拜』付録のCDを返し、持参したノートパソコンで見せる、奥さんも興味を持って寄ってきて見ていたが、葬式のところでずっと出て行く。やはり葬式は、ここでも特別な場合を除きあまり見せない方が良くようだ。

一四・五〇—一五・二〇 新築のCX氏祠堂に行き、始祖の忌日前日の読経と前夜の集まりを見学する。祭旗が立ち、すでに読経『真武妙経』、かたわらに『経灶王、土地、玉皇、消災』と、『日用誦経』が置いてある）が始まっていて、長老四人が殿内の上席に、庭には二〇人くらいの若い者が座り見守っている。祭壇には、三牲を載せたお盆と、バナナ、龍眼、ランプータン、リンゴなどの果物を主体とした供え物と生け花で飾り立てられ、賑やかな雰囲気醸し出している。

一五・二〇—一五・四〇 ソム・カウのクワン（館）を覗くと、出夏儀礼にそなえて六〇代の年寄りを中心に七・八人集まっている。座りこんでお茶を飲み、出夏儀礼の寄付リストを見せてもらい、応分の寄付（五〇円）を出し、写

真を撮る。

一六・〇〇—一六・二〇 勅亭向かいの屋台でCX氏始祖忌祭の供え物用に龍眼1kg(二〇円)を買って祠堂に行く。読経はすでに終わり、茶飲み話をしているところだった。

八月一九日
六・二四 CX族始祖忌祭のダンカイをとめるCXDの家で、宴会の準備の様子を一渡り撮影したのち、祠堂横の道を通って大亭の出夏儀礼を見に行く。遠くから太鼓の音が聞こえたが、これは隣の広場で行われる体育大会用の子供の獅子舞、龍舞のための伴奏で、亭での祭礼は未だ始まっていない。出夏儀礼はすでに何回も見したが、これまでのとは違った角度からの撮影を心掛ける。儀礼が終わったのかと思うと、祭壇上にはまだ豚の頭がのっている。しばらくすると、CXが来て読経、イエン父ともう一人が加わり、三人で礼謝諸仏の経、礼謝祖先の経を読み、最後に疏文を読んで燃やす。それを見届けて、大亭にもどり、こちらの方の受禄に与る。

受禄が終わったので急いでCX族祠堂に行くが、すでに戸が閉まっている。ダンカイ(宴会の当番)のCXDの家にゆくと、すでに忌祭受禄の宴会の最中である。正面入り口の座(祠堂奥と庭を結ぶ要の座)に誘われ、長老から大きな肉をつまんで碗に入れられ、閉口しながら有り難くいただく。

帰りに、ソム／アンの館でソムレベルの出夏儀礼の準備をしていて、お茶に誘われる。

一四・〇〇 寺の寄付箱を勅亭で開ける集まりがあるという村内放送。行ってみると、まだ人が集まっていないので、近くのデン武使臣にお参りする。堂守がトートム遊びで熱中しているの、奥をデジカメで撮影。さらに寺の庫裏の方に行く。電池が切れたので、家に戻って引き返すと勅亭はすでに寄付の計算も終わったらしく、人影がない。寺の庫裏でお茶を飲んでいると、高齢の和尚に引き合わされ、庫裡でデジカメで撮って見せたところ、えらくお気に召した様子で小僧やら居合わせた娘を呼んで記念写真。大きくして送ってくれと言いつつ果物の縁を下さる。デジカメはこういう効果があるが、印画したとき見た感じと大分は違うのがっかりされるかも知れない。

むらの中は昨日から出夏儀礼のため、人の出入りや活動のボルテージが高い。大亭での儀礼終了後も、あちらこちらの家庭で金紙を焼いたり、酒飲みの集まりも多く見かける。

八月二〇日
一五・〇〇—一六・一〇 ソムカウの館で出夏儀礼で読経が行われ、子供たちが粥奪い(身よりの無い餓鬼のため、地面にごぎを敷いて粥や駄菓子などを供えたのを、終了後争って取る)のため周囲で待ちかまえている。だんだん輪が狭まって、前に出ようとするので、年寄りが何回もたし

なめ下がらせる。お婆さんも、厳しく注意するが中高校生たちは聞かない。もつとも、このお婆さんは自分の孫を手許に座らせているので、少年たちも従う気にならないのかも知れない。そうこうしているうちに、高学年の少年たちが経を読み終わる前、勝手に飛び出して混乱する。それを制止しようとして人波に押し倒されたホアさんも、苦笑しながら黒いアオザイの埃をはらう。年齢秩序の乱れ、あるいは年寄りの権威低下の表れとも思われる。ゴン老の読経が予定の三時過ぎに終わらず四時まで延びたのも原因のひとつか。夕方ハノイで訪問の約束があるので、受禄を断り、家に帰って大急ぎで水浴びをして支度する。

一六・五〇 潮曲発、一七・四五―一八・三〇 市内ホアビンホテル近くのレ先生宅に伺う。家譜の比較研究プロジェクトを組んでいて、日本の事情を聞かせてほしいとのことなので、持参の系図をもとに説明。フエ行きのための紹介状をいただく。

八月二日
一八・五〇―一八・五二〇 ホアさんにソム・カウの出入夏儀礼寄付リストの家族内の位置を聞く。殆どが家長名義だが、一部に、年寄りが同一世帯に有りながら、若い者や天下人入り婚の名前が出ているケースなどあり。

一八・〇〇―一八・三〇 三聖デンに行き、クー老に、以前祭壇に見かけなかった新しい像の意味について尋ねる。説明によるとこの像は、蒙古軍を三度追い払った英雄陳興

道で「tien quan (先軍)」という。後で、「一般には、「聖 (quan) の方が通りが良いだろう」と教えてくれる。いまのベトナム語力では、これ以上つつこんで聞けないのが残念。しばらく座って、入相の鐘つきと札押をビデオに収める。帰って、明日のフエ行きのための荷物整理。

八月二日
一二・一〇 ハノイ発、一三・〇五 フエのフーバイ空港着、定宿のレロイホテルに行く。

一五・三〇―一六・一〇 DV教授(フエ大学史学科主任)来訪、挨拶、こちらのむらの調査希望を伝え、歴史文書が保存され、科挙合格者を輩出している春和社を勧められる。

八月三日
一〇・〇〇―一二・〇〇 DV教授の案内で、靈佑観を見学する。大西氏は、現在すでに姿を消したと思われる道教関係の施設を見つけたす名人で、その解説がまたすばらしい。その背後には、文献史学の造詣と現地体験の蓄積がある。たしかに、ここの祭壇には、釈迦、観音、焦面大士のほか玉皇上帝、張天師が祀られており、通常の寺やデーンとは明らかに異なっている。八二歳の老婆が出てきて見守って居る。室内の写真をとり、対聯、牌位などの文字資料を写し、さて聞き取りをしようとする、DV教授の言って居た通り、何にも知らない。若い男の人五二歳が出てきて大声で話しかける。文句をつけられたのかと思っていると、単に声が大きだけで、最近のことはかなり知ってい

るが、旧いことは矢張りわからない。祭壇の横に、儀礼的
子売り儀礼 (Dan Khuan) のリストがあり、頁ごとに道観
の印が押してある。この資料は、潮曲でも見たことがあり、
背景や処理方法を明確にしておかないと役に立たないので
複写せず見るだけにする。

水上レストランで昼食 (茹でイカ、鹿の焼肉、ウナギスー
プ)。通りかかる河船の叩き漁が面白い。

一六・一〇—一八・一〇 春和社金龍村へ、NDC氏の邸
宅。以前高官で革命運動に参加し、女学校校長になった先
代が、もと公主の邸宅を買い取ったもの。一八九五年の建
築で、庭園、祭壇が豪壮である。このあたりは、当時虎の
沢山居る荒地で、三日だけ皇帝だった育徳帝の公主から
買い取った。社会主義の下でも、革命に功績のあったエリ
トには、このような生活の余地のあったことを示す例とし
て面白い。

一八・三〇—二〇・〇〇 地元の料理屋の庭で海の幸の生
春巻きと鍋料理。七六歳のW老から富春大学建設の壮大な
構想を聞く。海洋環境研究所など地の利と時代の流れを視
野に入れ、高給で優れた研究者を集めるといった夢の部分
だけでなく、現実就職までの具体的な見通しを立てた学
生の募集方法まで練られている。ハノイで古希をとつくに
過ぎた長老がフエからわざわざ出てきたのかと冷やか
されながら、説得を続け許可を取り付けたという。現在の

経済不況のもとでは様々な困難があるだろうが、台湾の例
でも明らかなように、大学の数は高度経済成長と共に飛躍
的に増加することが予想され、古都の歴史を背景にしたフ
エ学というのが成立する文化的雰囲気を持つこの地で、しっ
かりした研究教育の拠点が增えることは素晴らしいことだ
と思う。

八月二四日 八・一二 春和村PDK氏宅を訪問、聞き取りの後案内さ
れた居宅に接して建てられている祠堂の規模に驚く。瓊堆
の名族の祠堂も外観は大きく、ハノイ近郊の東顎社にも祠
堂祭壇部分の大きなものはあったが、ここは祭壇部分の奥
行きと言ひ、内庭の広さと言ひ圧倒される。

八月二五日 八・一二—一〇・〇〇 春和村LC氏の祭壇、祠堂を見学
し、家譜を見せてもらいながら話を聞く。

一六・〇〇—一八・一〇 むらの亭と城隍神である開村者
の神位を安置した開耕廟を見学、HDK宅で家譜を見る。
七・二〇 宿の向かいにあるホン河の波止場を覗くと、渡

御船が勢揃いしていて船上に祭壇をしつらえ供え物を並べ
るなど準備に余念がない。陸から盛装した人々が列を組ん
でやってきて乗り込むのに出会う。列二列のうち一列に少
数民族の服装、顔に墨をぬっている。ビデオで撮したはず
が、オンになっていなかったのに後で気づく。

八・二五—一・〇〇 LQQ氏に、家族、部屋割り、分
立、葬式について聞く。

一五・三五―一八・一五 保大帝近衛兵をつとめたという
L氏（八八歳）に富春村と他の村との関係、婚礼、来世
について聞く。暑い中、盛装して、姿勢をくずさず、長い
質問に丁寧に応え、竈神について質問すると、炊事場まで
案内して下さったのは頭が下がる。木彫りの変わった
形の神像を見ることができた。

八月二七日

船渡御祭のためチャーター船でデン・ホンチェンに行く。
途中、天母寺に寄る。やはり、デン・ホンチェンに参拝す
るため祭壇をもうけ盛大に飾り付けた船が、この寺の前で
止まり、膨大な量の冥紙を川で流し、祭壇、それから四方
に向かって礼拝をしている。水難者および水鬼への慰霊の
ためであろう。寺でも、黄色い衣をつけた僧侶が八人本堂
祭壇前で読経をしている。本堂の仏像は、正面に三尊と釈
迦、左右に一体ずつ仏像と正面外に弥勒仏を祀るだけの簡
素な構成で、通常ベトナムのむらで、ひな壇式にぎっしり
並べられた仏像群を見慣れた目にはむしろ、新鮮に映る。

デン・ホンチェンは、以前、平日に行ったときは、参拝
客が無く建物と祭壇を見るだけだったが、祭日当日は森の
こんもりと樹々の生えた丘に、ベトナム国旗や祭の幟をは
ためかせた船がびっしりと取り巻き、接岸さえ難しく、音
楽も賑やかである。離れたところに船をつけ、木の根本に
掴まりながら這い登り、入り口で押し合いながら入場料を
払って入り、本殿まで牛歩でたどり着く。あまり広くない

八月二八日

本殿の庭は、供え物や線香を頭上に差し上げたまま進んで
いるような感じであり、船着き場を見下ろす別殿の庭も渡
御船で行っている歌などの余興を眺める人たちでびっしり
詰まっている。本殿から船までの御輿行列も見たいが、こ
れ以上の混雑と動きは予想を超え剣呑なものと、それを見て
から船に乗り込んでいてはカイクット村での渡御行事に遅
れる恐れがあるので、先に船で先回りして、カイクット村
の方で待ち受けることにする。ところが、船に乗り込み村
に向かうとすると、エンジンが一向にかからない。結局、
船中で着替え盛装を凝らし、船上に立つてカイクット村へ
向かう数百の船を見送りながら手こぎで漂い、ようやく通
りが掛かりの舟に曳航してもらいフエに帰る。船を予約す
るとき、すでにどこも満席なのをホテルの支配人が無理に
話をつけてくれたのが裏目に出たのかも知れない。

宿を朝六時に出て、春和村の亭での秋祭り準備を見る。着
くとまだ二人しか居なかったが、木をくりぬいた材木太鼓
を叩くと村人がぞくぞくと集まる。用意してあった赤や黄
の紙に墨書した対聯を柱に貼り付け、旗を庭の洗濯柱立て
のような足場に差して立てるなどそれぞれ思い思いに作業
をして準備が整ってゆく。ひとわたり、準備の様子を見せ
てもらったので、引き上げる。

途中で天仙聖教の本部に寄る。聖堂は閉まっていた、待
つ間に境内を見回る。川に面した小さな水府宮のとなりに

ある茂みに沖縄の嶽の拝所そっくりの小高くなった茂みがあり、川砂の道を上ってゆくと左右に石積みみの洞に香炉を置いた祭壇が一〇位あったのが目を惹く。なかには、二層になっていて下に虎の像を置いてあるものもある。やがて管理人と信者が現れ、立派な構えをもった聖堂の内部を拝観させてくれる。吹き抜けの二階になっていて上下二層に多くの神像が祀られている。しかし、改修は止められていて、窓ガラスをきれいなものに替えただけで連行されたという。二階の祭壇を見ているとき、下の方で一人の信者が憑依状態となり飛び跳ねていた。

春和村秋祭第一日

一五・〇〇―一五・三〇 亭から村の開拓者の位牌を祀つてある開耕廟まで、迎えの空御輿を、一応小太鼓とチャルメラ二本を先導に行列を組んで繰り出す。ビデオカメラのスイッチが利かず、ステイールモードを交えながらだましまし撮影。開耕廟で礼を行い、安置してある勅封を迎えむらの中を太鼓と笛二本の先導で、旗一〇本、「回避」と「静粛」の板、武器一二本、大太鼓、銅鑼、小太鼓とチャルメラ二本、青服の先導二人御輿に幡を差し掛けながら、輿を四人で担ぎ、青服の付き添い五人、さらに青のアオザイの一五人、その後を最長老、平服や、黒服の人々や老婆四人も混じり村の中をゆっくり進む。亭につくと、旗指物や武器は庭に置いた台に差し立てる。庭で燭台に点火し、

勅封二箱を正面奥の祭壇に安置する。各祭壇のロウソクに点火。

一六・二〇 正礼の準備、未だ明るい竹に燃料をつけた松明を点火、本来は晩にやっていた儀礼の名残という。

一六・二八―一七・〇〇 正礼開始。正装した役員が殿上にのぼる。黒い衣服を着た旗持ちはその旗の後ろに整列。この時開始を告げるため、向かつて右の軒に吊してある魚の形をした馨を敲く。次に庭に吊した大鐘を大きな木槌で敲いて鳴らす。それから同じく庭に置いた大太鼓を叩く。献官が壇前に進み、上香、進茶を儀礼の作法に従って進め、それぞれの壇前に立って礼官が同時に起拝、輿を繰り返す。整然と進行するが、うっかり忘れていた者が居ると列に立っている年寄りが小声で注意し教える。これらの節次は、すべて東唱、西唱の発声に従って行われ、それに笛、太鼓などの伝統器楽の音楽が賑やかに伴う。まわりの人々は、平服の人も含めて真剣に見守っている。赤い襟をした青服の正祭が各壇で拝礼を行い終わると、むらの幹部など、賓客が礼物を供える礼が続く。私たちも、教えられた通り供えて礼をする。今晩は、御輿が夜を明し、明朝の行事も未明開始と早いので、一七時いったん宿に戻る。三・三〇 起床、洗顔して早速予約してあったタクシーで春和に向かう。

四・二〇 亭につくと、殿上に人影はないが、電灯が煌々

と灯り、側室で人々が待機している。中央の供え物に豚のほか、何と小さいながらも仔牛一頭まるのまま供えてある。五牲でこうして牛一頭をそのまま使ったのを見るのは初めての経験である。手順は、昨日とほぼ同様ながら、供え物が整い、周りが真つ暗なので、松明も映え荘厳な雰囲気。昨日は黄色い布で覆われていた祝文もビデオの望遠で何とか読みとれる。漢字の横にローマ字が振つてある。これほど、格式を保った儀礼が行われるのに、その役を務める人の内には漢字が読めなくなっている者が出てきたことを示す。

四・二七 正礼の開始。

四・四六―四・五〇 読祝開始、朗々とした声がマイクを通して村中に響き渡る。

四・五一―四・五八 右側の祭壇で読祝、ややしわがれた声。各壇で進茶の礼。

五・一五正祭が各壇を礼拝、続いて祭官一同が順に礼拝する。

五・二二―五・三一 最長老を皮切りに、一同が拝礼。礼を終わる。

五・三三 祝文を庭に持ち出し、正面門障壁近くの地面にバナナの葉を敷いたところで燃やす。外はすでに、かなり明るくなっている。

五・三六 到着時に比べ割と簡単に、勅封を持ち出し奥に

載せる。

五・三八 勅封を戻す行列出発、幡などは持たずに早く進む。

五・五四 開耕廟到着。勅封を安置。

五・五六 開耕廟での儀礼。

七・〇〇―七・五〇 受祿の宴。座順は、北部と反対に、

庭に近い方が上位。地元の長老が中央に、外の幹部や客が中央の列に座り、最長老と向かい合う席を与えられる。左右に、黒い衣を着た人々がそれぞれ三段に分かれマムを囲む。

九・三〇―一〇・〇二 天仙聖教の聖堂を再び訪れ、神像名などを確かめる。一階の中央は、玉皇上帝二階中央に第一尊堂、第二尊堂、第三尊堂の各女神、向かって左が父王（陳興道）の帽子と靴、うしろに第一聖母、第二聖母、第三聖母の絵、その左に部下や馬、向かって右には、同慶帝を交えた絵や、皇太子の位牌などが祀つてある。

一三・〇〇 飛行場一四・一〇 ハノイ一五・〇〇着

潮曲 Quat 忌日前夜

八月三〇日 九・三〇―一・三〇 Qの母親の忌祭

八月三十一日 一〇・二〇―一九・三〇 ハノイ発、香港経由で成田着

今回の調査で興味深かったことを列挙すると、以下の通りである。

A. 潮曲調査では、変化の諸相を観察できた。

一、三聖デンの神像追加。

二、カイフォン「翁堆爺」が、ふつうのタイプに改修。

三、祠堂が新たに建築。

四、環境汚染の進行。池の末期症状。十年前は、ハスの花が咲き、魚が住み、子供が泳げたのが、辛うじて池の形骸は留めていても①寺池（一応、水は湛えるもののハスも生えなくなる）、②ソム・レの池（泥沼化）、③ソム・アン、ソム・チュアの池（ザオムン栽培）、④その他の小さな池（ごみため、埋め立て、空き地）の一部はすでに埋め立てられ、宅地化してしまっている。

五、年齢秩序の乱れ？出夏儀礼で少年たち長老の制止利かず。

B. フエ調査では、中部の特色を、祠堂、宮廷との関わり、テンヤーナー女神信仰などにおいて垣間見ることが出来た。

一、女子が生家の正面祭壇で祀られていることがあり、また、家の外の庵（北部のカイフォン）で祀られていることもある。

二、祠堂の広壮さは、宮廷の膝元という地理的な影響があるのかも知れない。

三、村の祭礼が、儒礼に従って行われる点は、北部と同様である。復活させる指導をしていると語っていたインフォーマントが居たことは、ここにおいても、一時断絶が見られたことを意味する。

四、水上からデン・ホンチェンの祭に関する活動を覗くことができた。船上の祭壇、冥衣流し、デン・ホンチェンからカイ・カット村に出發する際に着替えて、盛装し船上に立って向かうこと。

五、儒教を教条的と言えるほど重視した阮朝のお膝元で、テンヤーナー

など異系の神々への信仰、道教の痕跡を多数認めることができた。

参考文献

末成道男一九九八『ベトナムの祖先祭祀―ベトナム民族誌』風響社
田村克己一九九八「皇帝と女性の祀る社―ヴィエトナム、フエのホンチェン殿」
『東洋文化』七八・一三三―一五八頁。